

◆高齢者が安心して住み続けられるまちづくりを

高齢化が全国的に進む中で、国は介護保険制度を大きく変更し、自治体の役割がより重要になっています。宗像市でも、団塊世代が75歳以上になる2025年には高齢化率が30%を超えます。高齢者が住み慣れた地域で、安心して生活をするためには、介護予防の事業や地域で支え合う仕組みづくりが必要です。そこで市の考え方と取り組みを質問しました。

これまで介護保険の対象だった要支援1、2の方のデイサービス等の事業が「介護予防・日常生活支援総合事業」に移行し、自治体の事業になります。

1) 現在、デイサービス等を利用している高齢者は、4月から介護保険外のサービスとして利用することになります。対象者に新制度を十分に知らせているか？

答 対象となる本人に、市の担当者が直接説明し、利用案内をしている。



2) 介護認定を受けなくても利用できる(事業者による)サービスを利用する高齢者が、かなり増加すると予想されます。受け入れ体制は、十分か？

答 4月からは63事業所になり、十分だと考えている。しかし、今後も高齢者は増加していくので整備を検討していきたい。

☆ネットの提案

高齢者宛に市(行政)から送られてくる書類が、表も中身もわかりにくいと言う声をよく聞きます。一目見て大事なお知らせだとわかるか、内容が理解しやすいか等高齢者の視点で点検し、改善することを提案しました。
*今後精査し、わかりやすくしていくと回答がありました。

市民ネットの「子育て・介護を一人ぼっちにしない」のスローガンを思いだした。一緒に頑張ろう!

3) 新制度では、地域で支え合う住民主体の「訪問型サービス」も重視されています。これからどのように広げていくのか。

答 現在は数地区の自治会等がボランティアで実施している。まず、その団体に補助を行いたい。それをモデルに(地域の実情に応じ)徐々に広まると良いと考えている。

(*)住民主体の訪問型サービス

多様な生活支援ニーズに対して、総合事業の中で多様なサービス提供をするために、住民が主体となって生活支援サービスを行うこと。



☆ネットの提案

地域で支え合う体制づくりでは、中学校校区ごとの地域包括支援センター(これまで3地区に配置)が重要です。生活支援コーディネーターが置かれますが、その地域で福祉関係の活動をしている住民の方々と情報や意見の交換を十分して、地域の課題に取り組むことを要望しました。

孫育ちの現場から

運営委員 H・S



私の孫は外が大好き。雪の日も風が強い日も小さな足でとことこ歩いて公園に向かう。マイペースで遊んでいる子どもたちを見守りながら大人たちはおしゃべりをする。

「一人目なので何もかもわからなくて」「離乳食がなかなか進まない」「公園の入り口が急で危ない。」も少し緩やかだと良いのに「体調が戻ったら週3日くらい働きたい。そんな預け方ができる保育園があったら助かるよね」など。同じように悩みを持つ人と会い話をすることで一人ではないと安心する。また、お互いの経験を語り合うことで前向きになれる。

子どもと親が孤立することなく安心して生活できるように、障がいのある無に関わりなく将来へ希望を持って学び、その子らしく生きられるようにと、すべり台をすべる孫を見ながら願う。

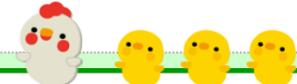
◆切れ目のない子育て・子育て支援を

宗像市では、4月から「子ども相談支援センター」が開設されます。相談の窓口を1つにし、関係機関との連携により相談支援体制の強化が期待されています。これまで子育て支援の様々な取り組みが行われ、充実が図られてきましたが、まだまだ課題があります。今回は、乳児期の支援、障がいがある子どもへの支援などについて質問しました。

●乳児をもつ親の孤立を防ぐために

乳児を持つ親の孤立やストレスを防ぎ、産後うつや虐待の予防として、1歳までの支援が重要です。特に、子どもとの愛着形成と子育ての仲間をもつことが不可欠だと言われますが、どのような取り組みをしているか。

答 妊娠期から産前産後、育児まで妊娠包括支援事業を開始、子育てに関わる支援団体や地域と連携し、子育てサロンや子育てサークルなどの仲間づくりや居場所づくり、保育園や幼稚園、認定こども園で集団遊びの体験や相談事業を行い、体制をさらに強化している。



☆ネットの提案

育児応援プログラム「I P P O (いっぽ)」の実施を提案しました。(近隣自治体では行っているところがあります。)

第1子で生後2~6ヶ月の乳児母子を対象とし、育児の不安やストレスの最も高い時期に人とつながり、ベビーマッサージやあやし歌を通してわが子を慈しむことで、子育ての楽しさを感じ、良好な母子関係の土台づくりを支援するプログラムです。

*他の事業との関連もあるので、内容等を総合的に判断したいと回答がありました。

●高校生の相談場所

高校生の不登校、中退者は少なくありません。不登校は引きこもりに繋がるケースもあり、早い段階での対応が必要です。4月にオープンする「子ども相談支援センター」で相談できることを生徒・保護者に周知するために中学卒業時に案内することを提案しました。

*卒業時に子どもたちに案内を配布したと報告がありました。



●障がいを持った子どもへの支援

将来の進路の情報が得られにくく、そのことが将来への不安を抱く一因になっています。そこで
①高校進学についてどのような支援を行っているか
②今後の教育支援の充実を図るための取り組みをどのように行っていくのか。

答①福岡県主催で、特別支援コーディネーターの研修が行われ、高校の学区ごとの中高の情報交換などを行っている。就学サポートノートを活用し、保護者・子どもと相談しながら支援の情報等を高校へつないでいる。また、高校や特別支援学校の高校部と連携し、保護者と共に体験入学をもらったり、進学相談を随時受け付けるなど、対応している。

答②特別支援コーディネーターを中心に学校として組織的に取り組めるよう市の研修会や校内研修などを行い職員にも学習の場をもっている。今後、生徒たちへは、インクルーシブの理念を踏まえ、多様性を尊重し合うことなど日常の授業や道徳の時間を通して積極的に指導していく。

☆ネットの提案

①進路の情報について学校や担任の先生によって差がないように、進学先の高校の情報や就労支援の事業所、就職先などをまとめた資料ファイルを中学校に設置すること。
②障がいのある小・中学生の親と卒業した親との情報交換会の場をつくること。
*学校の意見も聞き、(可能かどうか)検討するとの回答がありました。

